英国 午 日 ル -数年前、 8 カン ほど滞在したことが 6 Щ 5 地 時 で 3 岳 ん思 あ 会 間 を訪 が 0 た。 VI あ 0 ね VI ょ 13 W T た デ みる ŋ T 0 で、 0 0 あ 1 で る。 P 駅 ンド あこ 1 ٤ 7 な あ に お 0 が る 0 ンに ŋ L 木

題 いだすまま」 とした次第

\$

薬に

\$

な

6 柄

を、

ねて 覚、

責 毒

ル

で 0

板も

か 0

カン T

0

な 5

6 る。

足

8

T \$ 术

は 神

0

L

ま

1

どう訳

したかは

秘中

0

が あ た

ŋ

0

人にたず 看

ねて

4 T す て 家

たが、

7

ル 通 E

IJ をと

アン

な 見 様

が

さ

n て ス

义

書

通 ラ か T は 書

0

玉

して

か

5

女の

ス

ナ 秘

" 6

プ

ラブなん

て知

5

な

٤

た。 ブラ

から

ならび

奥に

は

7 室

2

1

ル

5

早

-速返事

きた。

是

非

度 を

立たう

2

ピ

L

E°

あ

そ

ラ

イブ

ラリ

T

御 0

来 た

をま

5 を読

T

る。

緒に

本 再

いが

山

0

ことを楽し

4 日

L 0

T 5 i か

たが

に にない

を自然 ŋ

を

カン

ね な

ば の

と大上段に

5

5

0

T 所

より

だし

歩 ۴

た。

8

家

屋 号

0

会長

0

1

1

V

1

1

於 廊

カン 0 0

か

0

VI

꽢

日

アム

ス

テ

ル

芽

4

0

ホ

テ

ル

が

想像と違 て

見

ぼ 0 屋

L

V は

V

ず

n

7

ラ

巨

人ば

ŋ

語

0

英訳を試

みて

航空便

送っ

T で、

お

なに

か

堂

K

٤ カン

た

て、

才

IJ

通

を あ

番

を

た

٤

案内し 間を

てく

n け

る。 口

П を

壁に

歷

て

V

通

n

ぬ

廊

通

て

义

室

ご尽力に

あず

かることが多いと

当 0

時 H

D

ンド

ン

江

お 0

5

れ V

神

原

会

本の

山

岳書

コ

2

藤

平

IF.

夫

じてく

葚

ŧ

n ず

た。 だと、

で

き ル

た を

0 な

は 5

妙

のご

婦 出

人で、 L

ル H

な文字で

好

たきだと

べ

呼

び

てく

本語

でも書

V

てく

れ

E

7

1

フ

日

会 7

と名の

ると中

は たすことにし

パ 1 す

まず「 英国山岳会」 訪問 の

仕事の関係 か 12 ここで 乳 ル う。 か を探しだして 配達に聞くと、 V 親切に

あ

る。

よく

見る

と入

口

た

冊

もだし

た。

1

で

IJ

1

ブ

地

住 0

> る カン

小 な 50

ス から 架

ク

が

あ

き 階

T

n で ル

は 母 VI

日 0 1

本 デ

あ

ると

書

架

カン

5

何

る

٤

あ 本

5 也

V

本を

ブ

"

لح

V

5

ことをは る

め

T

知 IJ

0

あ ラ 母さ は て る がライブラリ テ て、 12 バ は ŋ 2 7 け 7 ンが ザ 7 ル あ パ る V 1 だけ る 0 ボ は

8

あ 0

とり

だし

てく す

た

が ル

> 5 \$

日

VI 0

7

送ることを約

うる。

V

0

ナプ てく 本も数多く

ル n

ナ

アチ 残念な

3

1) ことに私

ザー

が

な

本名

Ш

圖

で

あ

7 n

1 0 る

ٰ

1

0

日

嶽 0

が

女

想 す

1990 年 (平成二年) 月号(No. 536)

日本山岳会 The Japanese Alpine Club 定価一部 150 円

目 次

想いだすまま………藤平正夫…(1) 海外の山……(2) 「国際隊の南極大陸犬橇横断」 カトマンズクラブエベレスト登山隊 概要……大西 宏…(3) 東西南北 ………(4) 「私の日本山岳会入会の 動機に就いて」「『魔の山』とスキー」「会 員通信特集(1)」 タンボチェ僧院再建協力者ご芳名.....(6)

自然保護随想……澤井政信…(7) 図書紹介(7) 「風の冥想 ヒマラヤ」ヒマラヤを 釣る」「ヒマラヤ冒険家族」「悠峰 2号」「Alpinismo Españolen el Mundo」「RIMO」

報告……(9) (ロ 「忘年会報告」「故古市義孝氏追悼 集会」「雨具を めぐる シンポジウ ム(2)」「『雲の中のチベット』出版 を祝う」

図書受入報告 ……(13) ルーム日誌………(14) 新入会員……(14) 住所表示変更 ……(15) お知らせ………(15)

▶日本山岳会事務取扱時間

金曜 日曜・祭日は休み ▶図書室開室時間

お知らせテープ電話

234

六

六

五

九

げざるを 1 から V 折 訪 CV° を 智 込み 4 わ 字で 解説 者愛· 問 0 n 0 0 カン た 0 T 5 す え ŋ + 高 し 閉 な る 1 な L 頭

月,火,木,土曜 10時~20時 13時~20時

日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時~20時

水仁者 てく П た カン V 氏 を ٤ 英 L n 0 楽 0

章のこと

だどは 3 五. んよろ 年前に再度 家内 と旧 婚旅 P 1 ンド 行 ザ で あ 訪 0 た。 n な 上

室も案内してもらった。 こで行われるとのこと。 な教会があった。 から 旗もあった。 ある。当時ご存命であった昭和天皇の チルの席もあった。 んど英国の貴族とヨーロッパの王族 椅子があり頭上に各々の家紋入りの 縫いとってあった。 なったら旗はおろし、椅子の横に旗 ター勲章は、 がさがっている。 レプリカがはりつけられる。チャ 私 は二度目だったが、 ガーター勲章の受章式がこ 深紅の地に金で菊の紋章 その人一代限りで、亡 案内役のM氏の説明 数十本の旗はほ いうまでもなくガ 壁に作りつ 勲爵士の控え 城内に小

国際隊の南極大陸犬橇横 断

到達、 国八人)同様、この犬橇行の特徴である。 昨年北極点にたどり着いた「アイスウォーク」隊(七か が歩き続けている。既に南極点には昨年十二月半ばには を生んだ一九一一年当時とうって変わって、米、英、 、連、中国、日本という六つの国の混成隊であることが、 南極点一番乗りを競い、スコット隊(英)全滅の悲劇 氷点下四十五度の南極大陸を、 目標の「大陸横断」まで千まに迫った。 いま六人の男と犬たち 仏

ある。共に「地球の頂上」を志向し、 で北極点を目指していたアメリカのウィル・スティーガ 偶然の出会いが、 けである。 仏人医師、 二人は、当然の如く次の目標を 八六年四月九日、北緯八五度の北極海のど真ん中での (四四)、単身徒歩でやはり極点に向けて歩いていた ジャン・ルイ・エチエンヌ(四二) この計画を生んだ。七人の仲間と犬橇 「地球の底」に定めたわ それをなし遂げた の二人で

着点まであと千十九*。

人も犬も順調」というものだっ

V た。

でいるところから見て、快調なペースらし

一月中旬には一日で五十まという最高の距離を

か

連からオゾン観測の専門家、 縦断に挑戦したことのある舟津圭三(三二)が参加、 九)、日本から、 者も加わり、 雪氷学者の秦大河・蘭州大教授 英国から、 中国から 南極基地勤務三年のジェフ・サマー 六か国六人のメンバーが決まった。 自転車で北米大陸の横断やサハラ砂漠 南極越冬隊長をつとめたことの ビクトル・ボヤルスキー博 (四二)と、 二人の科 ズ \subseteq あ

禁止とのことでどうしても無理と後日

知らせてきた。

残念なことであ

\$

ないのでM氏に託してきたが、 私のもっていたカメラではとれそう か」と念をおすと「イエス」である。

撮影

で思わずふきだしたくなる。

傍にたっていた神父にたずねる

「アルパイン・クラブの会長のハン

・ハント」と答える。

の顔が、 #

稚拙というか実にユー

・モラス

をこちらにむけている紋章である。

デ 熊

顔

イン化はほとんどされておらず、

三つならんだ雪の山を背景に熊が

た旗が眼にとまった。

ザインした紋章のなかに、

一風変っ

ものものしいライオンやドラゴンを

なったが、 千*:弱。 に米観測基地がでん、と居座っている点が違ってい 以来七十八年ぶりの犬橇による極点到達だったが、そこ 間地点の南極点にたどり着いた。アムンゼン、 るいは太陽の黒点活動の影響で無線が通じない状態とも がら九月には海岸線から山 て位置を探査する「アルゴス」システムで位置 部 ぐらいだから、南極探検の「遠さ」がうががえる。 たり、 目指すソ連のミールヌィ基地までこの時点でさらに三 「出発以来百八十八日目。四千七百四十四;地点。終 にレポートされるが、最新の情報は一月二十九日付け 行の動向はアメリカの隊本部から週一回、 十七七 北極点までカナダ側からだと海氷上を通常千*。 クレヴァスに落ちた犬の救出に苦労したり、 三千百八十*。を無事踏破、 ブリザードで一日八*しか進 岳地帯に入り、 と共に出発。 先端のシー 十二月十一日、 人工衛星を使 ヌナタックを三 千六百 きに及 スコット

人の たいのは、 たようだ。 どうやらもうそんなことは言っていられない時代になっ 的 年に歩いて南極点に到達している)に次いで、 ードがこの世界にも力を持ちつつある。 E なまでの登場である。 マラヤでは個性のぶつかりあい アイスウォーク」隊のロバート・スワン隊長 「両極点到達者」が誕生すると思われるが、 東欧の激変も無論あって「人類」 国家という意識を持たない で失敗例も多い 「国際隊」 (江本嘉伸) というキー 新たに二 注目し 0

海外の山

として、

ネパール通が多く、

現地準備

と創ったという創会の主旨にふさわし で出会った者同士が一緒に山に行こう

今回の隊は隊長の金沢氏をはじめ

との通商上のトラブルに起因する国境

も滞りなくこなされた。

ただ、

インド

封鎖にともないプロパンやケロシンの

入手には少し手間どった。

今年は天候が不順で、

おまけに雪も

たのではないかと思う。

サーダー

ったが、サウスコルに飛び出すと、

子

かなりコンディションは不良だ

テンバも

「例年に比べて風も

強 0

がせぬ

強

風が吹きあれており、

テ

あの熊のトボケた顔は忘れられない。 た紋章かもしれない。それにしても、 ガーターを受けたとき、 はどういう出自か は 即席に作 知 5 ぬ

控室の写真があって多数ぶらさがって の一部がうつっていた。 いる旗のなかに、 城内の売店で買った本の中 チラリとハントの旗 に、 この

力 1 マ 工 ン V ズクラブ スト登山 隊 概

要

大 西

宏

破で疲れが少し残っていた私にとって 日本の雑踏で過すよりも英気を養う の他は別段体の故障もなく、 七月初旬に山本篤と先発隊としてカ マンズクラブの隊員としてエベレス 年の三国友好登山隊に続き、 持病のアレルギ 北極踏 カ 指示も的確であった。 Ļ 含まれており、 ルパメンバーは東南稜の経験者も多く 縦走者アンプルバが中心である。 で行い、シェルパは三国隊南側からの 前大のメンバーと三谷、 順調にルート工作は進み、 サウスコルまでのルート工作は、 雪も多い」と言ってい 心強く、 山本篤、 パルテンバの た。

シェ

大西

弘

トにやってきた。

マンズ入りしたが、

3 表通りに実動が消化され、 全て固定した。 アタック体勢が完了するまでは運行 しサウスコル間も、 二日でロープを 楽観ムード 山場のC

ことができた。

カトマンズクラブとは、

カトマンズ

てアンプルバを含むシェルパ三名であ る手前で、 次隊がサウスコル上の大斜面が急にな がかなりあった。 なくされることによって吹きとばされ しかし、 雪板雪崩により敗退を余儀 その楽観ムード 山本篤、 b 大西そし _, __

クー 維 だまらないところに雪が不安定に積 たことが起因して、テント出発直後雪 にあてられてしまった。 持や幕営生活に苦労を強いら ンブからの吹き上げで、 普段ふき n た。

いぞ風が止むことはなく、 ったあとの三次アタックも厳しいも アタック日和を念願していたが、 一旦BCに 0

雪板のある部分を迂回するなどの工夫 プの明りを頼りにサウスコルより行動 んでいた。 る。チベット側の景色がやけに懐しい。 イックス工作をし、さらに をしてとられた。途中、 を開始し、 とチェルディムドルジェはヘッドラン (私は昨年北東稜で日夜登山活動に励 原、 天気待ちの後、 頂上へ向った。出だしのルートは 吉村そしてシェルパのロプサン 酸素ボンベ各自二本を背負 南峰基部にフ 山本篤、大西、 登り 続 け

追いついてきた。 になり、 となる。 巻くと、 メキシコのカルロスや韓国隊の張氏も 急なピナクルをクーンブ側から慎重に で登り切ると、起伏の多い雪稜となり、 力的には正念場であった。 雪は軽く不安定で、 残置フィ 取付で二の足を踏んでいると 風はますます吹き荒れるよう ヒラリー ックスを掘り出 三谷さんが本領を発 ステップの取り付き 南峰の登りが 山本篤先頭 す 体 時

稜側は尾根状になっていない感じだ。 にせり上ってくるのはわかったが、 傾斜がゆるくなった雪稜に出 間にも及ぶ苦闘 西、山本篤、 点が頂上となっており、 遠征当初は登れなくても納得のゆく 三谷さんがどんどん登ってゆき、 の末、 核心部 北東稜が足下 西 大

を行った後、 揚するものがあった。 が、頂上を目のあたりにしてやはり高 くさり写真撮影などの 駆けるように サウ セ 七 ル

登山ができれば充分だと思っ てい

た

●ヒマラヤ地域環境 データベース作成

へと下った。

ヒマラヤ地域の環境データベース作 I 銀行の融資を受けて、 岳開発総合センター)では、 D(国際環境データベース) (国連環境計画) 在 来年一月から開始することになっ カトマンズの と協力、 ICIMOD UNEPOGR アジア開発 UNEP を基に、 (国際山

完成すると、この様な影響を評価でき ンジス河などの河口域のバングラデシ ることになるので期待されてい われているが、 に慢性的な洪水をもたらしていると E マラヤ地域 での森林の伐採が、 このデータベー ・スが ガ



私 の日本山岳会入 機に就て 会 0

高 尾 徳 繁

「四五四二番」です。

そして今

日本山岳会員であると誇

ŋ

次いで七月

代 当 恒先生の講演を予定し、 記念事業を計画した。 最大の会を自任していました。 0 年が会創立二十五周年に当るので、 福岡山の会の四代目の会長を勤めて |時私は昭和七年創立の古い歴史を持 九州出張所の平社員であったので東 会員数も百八十人を擁し西日本 は、昭和三十二年にさか 日本建鉄㈱ (早川種三社長) その一つに槙有 幸い私は二十 0 丁度そ ぼ る 員番号 二十日お礼と尾瀬行きを兼ねて上京有 司屋さんに昼食のご馳走に預かって恐 先生はご多忙中にも拘らず駅近くの寿 先生をお尋ねして、お礼を申し述べた。 楽町の毎日新聞のマナスル事務局に槙 を持って生きております。 日までは、

何回かお会いしていたのです。

登山家である事だけは分って

V

たの

して「山を尊び

山を愛し

山と共に

著名な

カラー写真を日付とサイン入りで頂戴 スル登山隊のベースキャンプでの記念 縮した思い出があります。

その時マナ

そういう関係から会社常務の故定

早川氏に厚

かまし

老兄の色紙と、

山の会の登山展を福岡

生く」の昭和三十二年七月二日為高尾

覚えていられたものと唯々感謝の気持

写真と共に、

私の部屋

に飾って

日当

た時の私達と温容溢れる先生のお 市の岩田屋デパートにて参観して頂

顔

たのです。

よくも私の事を早川氏は

くも槙先生ご来福を懇請して叶えて頂

京

から出張して来られた早川氏とは、

講演、 びに講演、 三船山のロッククライミング場開 可 8 私も行動を共にさせて頂いた。その際、 忙 の依頼に依る武雄市の南方近くにある 槙先生ご来福以来、 にされて正式に入会した次第です。 槙先生から「山の会の会長ともあろう 本山岳会支部発会式等々一 ん」と言われ、紹介者を故成瀬岩雄氏 のが日本山岳会の会員でないのは不 |なスケジュールを消化されその間、 杯でした。 北九州西日本工業倶楽部での日 山の展覧会、 陸上自衛隊福岡総監部 その 福岡山の会の記念 年 佐賀県武雄市長 の六月二十八日 週間余の多 での き並

『魔 0 (平成元年十一月二十八日 山 とス +

Щ じている。 ネ 直しているが、 フ スイス・ダボスの結核療養所ベルクホ イツ文学の代表的な大作の舞台である オサミット湯河原に意外に近いと感 私は閑居 (山荘) (関、 望月訳、 のムードが現在過している でトー 六十年前に書かれ 7 岩波文庫) ス・マンの を読み 『魔 たド 0

施設で共に暮している患者の生態が生 と厳しい気候の環境で山荘の完備した 0 々しく記されている。 家庭、 から隔絶された 『魔の山』 K はダボ 「山の上」 患者は スの美しい自然 経済、 で療養し 「低地 企

時の若 出と共に偲んでおります。 私も八十一歳、 Iかりし 頃を懐かしく 先生が九十五歳で亡 先生 0 思

くなられて遠い昔の夢の事の様です。 厚くお礼申し上げます。 早川種三氏も九十一歳の今日元気にし に存じます。 会社再建の神様としてご活躍 写真入りで報道されて真にご同慶 去る五月二十八日付の朝日新聞に 本当に当時はお世話になりまして 元気に永生きし のご模 て下さ

記

山 口 孝

記述を抄録する。

次元の高い時間、 希望と諦め、死生観、 訴えの会話、 7 いるが、 退屈な日常茶飯 社交、 健康と病の価値観、 友情、 文化、 事や病気の さらに

教等について、ゼテンプリーニとナフ 同感することができた。 は数十年前の冬と数年前の春に同 で詳しい説明を行っていることで、 験について小説とは思えぬ適正な判断 場とスキースポーツ、ツアー、 たのは文学者のマンがダボスのスキー 味は尽きない。就中私のとくに感心し 等を中心として展開する話題が続き興 青年療友ヨアヒム、 タの二人の教育家下弟子カストル スキーを楽しんだ体験からこれを理 読に値する書と思い以下に第六章の 顧問官ベー スキーヤー レンス 難体 地 宗 私 0 解

~二一八頁) スキー滑降の記述第六章雪 抄録 八

だ。 キーヤーで賑わってきた。 足だったが、やっと晴天にめぐまれ し必要とする技術を数日で て装備一式を買い求めた。 ニもスキーをする事に賛成し、 は 此処の生活に満足していたが、 冬の山荘は大雪吹雪の連日で日 ツは禁じられていた。 回転の技術 ゼテンプリー カストル 覚え込ん 人で練習 同行し スポ プ ス

(注) 一九二〇年代のスキー

時

0

が

良く記されている

(

降の基本となり現在に至っている。 み、 具を採用し、前傾、シュテムボーゲン、 単杖と代っている。その後ハンネス・シ でレルヒのリリアンフェルダー締具、 にも導入され、 制動回転が容易なスマートなノルウェ 力で深雪を直滑降で飛ばせる安定性と との上げられる 革製 ルシュヴンク、ウェーデルンが回転滑 ャニアからライネクリスチャニアに進 スキー術を開発し、 ホッケ姿勢を基本とするアールベルク とかかとの上らないラングリーメン締 ックはリング付の両杖で初心者も全速 ルエッジはないが溝はつけられ、 (フィットフェルト?)を装着し、メタ ナイダーがスチールエッヂ付スキー はフランススキーも吸収したパラレ 第二次大戦後のオーストリアスキ このスキーは同時代にわが国 五色温泉の六華クラブ シュテムクリスチ の ビンドウング スト

雪中の単独行

り)適当な舞台(ゲレンデ)と感じた。彼 じたけの絶対静寂の世界に入ることがで 時きた。この深い森の静寂さには土地っ たきなる人間の地位と本領を考える(陣取 なる人間の地位と本領を考える(陣取 なる人間の地位と本領を考える(陣取 なる人間の地位と本領を考える(神 本

は自然

海、

とのたわむれに親愛

感をも 勇気が出る。 登行である。 0 粉雪の六華模様に見入る。 ニを好んだ。 っていた。 (諸行無常)。 ナフタより善意のあるゼテンプリー ち、 彼は瞑想を続けテロリスト 危険を恐れない勇敢さをも 恐ろしいまでの孤独感で ただ一面「無」の世界の 世の中はなべて無常だ 黙々登高を 続け一服し

スイスのスキー

テレマークのできるかか

は本文によるとトネリ

\$

っと降ればまた正しい方向がとれる

冷降開始

気持で滑り続け牧人小屋の側を通過し が、 う不安と恐怖におそわれたが、冷静と とかしなければない」と感じた。 は麻痺した。 勇気を保っていた。スポーツマンはこ 世界に深く入って行った。 したが方向の誤りに気付き「しかし何 たが、視界ゼロで帰途もわからず前進 の場合無理しないのがモットーである 異様な陶酔的満足に浸りつつ沈黙の カストルプは 吹雪は凄い突風を伴って冷たく手 直ちに引返えす決心をし 「何くそ」と挑戦の 方向を失な

ルン遭難一歩手前の苦闘、リングワンデ

「俺は馬鹿気た一人言を喋っていて「これは吹雪の山中で道を失なった(死の誘惑)。しかしその危険を感
すた(死の誘惑)。しかしその危険を感
で(死の誘惑)。しかしその危険を感
で(死の誘惑)。しかしその危険を感

ち、 デルン循環 (Umkommen) に終ったの それは先程通過したヒュッテであり、 である! カストルプの苦闘は空しいリングワン り、平地、 俗物根性に外ならない」と感じた、降 で戦を止めない義務観念は道徳観即 たがモーロー状態だった。 だろう」(冷静適正な判断)。 やっと人家を見出したどりつくと何と 誘惑に抵抗のモーロー状態で前進し、 けちな現世市民主義と非宗教的な 再び急な登り、 強い追風、 「この状態 正解だっ

仙人は山の人俗人は谷の人。やっと大休止して彼は助かった。

会員通信特集(1)

さまからの近況を掲載します。(編集)会の「しおり」に掲載された会員の皆昨年十二月二日に行われた年次晩餐

東京・麻生武治(五二九) 一本寿老人。JACの会員であること 本寿老人。JACの会員であること ボケが何時くるかくるかの師走かな

は高齢(九十二歳)、父母も長命

神奈川・小原勝郎

(一三三四)

私

ているので、「脳活性度」も精密検査目下東京医大病院老年科が私の長寿遺目下東京医大病院老年科が私の長寿遺目で東京医大病院とので、当時の平均寿命は六十歳前後)なので、当時の平均寿命は六十歳前後で死亡したが、

東京・広瀬 潔(九三一)

て楽しんでおります。
なりましたが時々乗り物で行ける所になりましたが時々乗り物で行ける所になりましたが時々乗り物で行ける所になりましたが時々乗り物で行ける所

東京・武村市太郎(一〇三一)

神奈川・近藤恒雄(一一九四)

山梨・百瀬舜太郎(一三二四)

山を歩いてきました。

、四季夫さん、織内信彦さん、島田
三田幸夫さん、織内信彦さん、島田

苦労しています。毎日自分で注射をし 近は糖尿にて入院二ヵ月、体重も一五心筋梗塞にて入院九ヵ月に及び、最 ている状態です。 キロも減じ、 目下脚力の回復と通院に

神奈川・増本 茂 (一四〇五)

じています。 写真をとるということで生き甲斐を感 捻挫の後遺症で脚と腰が弱りました。 当年八十三歳となりました。 スキー

ます。

歳になりましたが、まだまだ山に登れ

福岡・月原俊二(一四三六)

障除去のため入院予定となっています 元気に過していますが、老人性白内

静岡・青木 昇(一七二二)

声を電話で聞いた。「私、オーストラ いたが、まさか永住されるとは思って 家を売りたいと言っている、と聞いて の大木千枝子さんから葉山のあの広 リアへ行くのよ」である。前にYWA この夏、二十年ぶりにおテルさんの

千葉・小野 幸 (一八三八)

いなかった。お元気で。

山は見るだけでした。 ーブへ。それとドイツに入りましたが、 先般フランスからTGV でジューネ

> 福岡 小 庸 \bigcirc 九三五

*:完歩。十月アマチュア無線局免許 七月トムラウシ山登頂、十一月三~五 日日本スリーデー・マーチ参加、九十 ン大会参加、白滝コース十九ま完走す。 (コールサインJN2MCF)。 七十六 今年は二月オホーックスキーマラソ られます。

愛知・三ツ石清 (一九三六)

まれ元気にいろいろやっています。 古稀を迎えましたが、幸い健康に恵

福岡・小林義明(一九八四)

麓を歩いてきました。 ーロッパアルプスのトレッキングを続 に恵まれてスイスの四○○○≦級の山 けております。十月には二週間、 相も変らず薮山歩きと、 年一回のヨ 天候

広島・泉尾忠志(二〇二〇)

います。 心深く健康生活に徹しています。年寄 が大事にされる会でありたいと思って 八十二歳、健康に過しています。用

東京・名須川 浩(二〇七六)

をみたものの、例年の様な白衣に身を 谷川連峰も初冠雪以来二、三回降雪

山と残雪期の事故の多いのに注目させ 山以来七三〇名を数え、このところ秋 固めた威容も見られず何やら物足りな い感じです。今年も九名の遭難者、 開

群馬・山口京一(二一三六)

残念でした。 今年は身体不調、 遂に山には行けず

東京・橋爪幸達 (三二六四)

辺りは歩行者注意。 な熊が居住し、 た。ブッシュの中にも一匹居り、 九月の尾瀬・裏燧では樹の洞に大き にらめっこして来まし あの

神奈川・水沼数馬(二三三一)

境の山を登って楽しい思い出を作って この頃は妻と二人連れで手頃の上信越 おります。 若い時は単独行でしたが、年を経て

新潟・山田一男 (三三五〇)

厚く感謝申し上げます。 山陰集会を盛大にもり上げて頂

鳥取・港

叶

(二四五八)

止めてあり、今年丸一年でまだ杖とビ ッコで歩くので倍の時間がかかりま 我にて腰骨にヒビが入り手術、金具で 老生昨年左眼手術、 十月思わぬ大怪

す山に行けなくなるのではと辛い一年 でした。

東京・渡辺嘉男 (二四七六)

七十四歳ですが、まだ時々低い山や 立川女子

間に年をとってしまいました。 原)も女の子が来るようになっては俗 和十二年頃母校(現在の名古屋大)山 思って訓練していたのですが、 変更せよ」の一言で遠見尾根に変更し たことを思い出し、今昔の感がします。 スキーにも行きます。今夏、 いつの日にかヒマラヤの未登峰へ、と 化したものだ。新人合宿には不適当、 岳部のOB会で某先輩の 高生のヒマラヤ遠征を新聞で読み、昭 関 (妙高高 行けぬ

東京·中埜愛三(二四七八)

の奥には思いつれど 々はわが足に遠くなりにけり 胸

Щ

山形・大橋克也 (二五三四)

(続く)

タンボチェ僧院再建協力 募金者ご芳名

村哲也、 裕夫、藤井信、宮城支部。五千円―野 子。一万円—大澤伊三郎、 雄、中島信一、渡辺節子、横溝修一、 五万円—吉村健児。三万円—吉永卓 熊谷正志、熊谷藤子、木下是 三枝礼子、渡辺健、 大森久雄、 内野

加代子、 樋口公臣。 高遠宏、 絹川 奥山善 祥 夫 太田晃介。 千円 Ξ

額一、四七一、〇〇〇円 一月十日現在累計一四六名、

募金振込先

郵便局 口座名 口座番号 協和銀行市ケ谷支店 東京七一三〇六〇 タンボチエ僧院再建協力会 三六五四六六 通



5 風 E 7 0 冥想 ラヤを釣る E マラ ヤ

0

空で結ぶ観光都市巡りツアーとは違 大なヒマラヤの大自然に接しながら、 とになる。 々の生活や歴史も当然ながら異 然環境が大きく異なり、 人々の生活や文化に直に触れることが まさに旅の真髄を味 境の地における ラヤの 山好きな旅行者にとって雄 素適な旅になるに違 高 い山脈の北と南では 「陸の旅 わわ そこに住 せてく なるるこ は む人 自

な ル

0

7

チュリ登山

隊における個人登山記と

を巡る旅行記であ 後半は中国のシルクロ

る。

力

ラ

7

ル 4

0

現代の

冒

険者たちは、

ラクダや馬

0

【自然保護随

負 0 フィ 0 1 1 F バ " F ク ツ 7

坂道を登るとき、 ドバックの機構が働いているためである。例えば まず起きない。これは身体のあらゆる所で巧みなフィー 心臓から多量の血液が送られているが、そのために何処 で常にその濃度を見ている器官(脳下垂体、視床下部な 濃度が何かの原因で減少したとする。そうすると脳の ンの働きを見るとよく分かるが、 かの弱い血管が破れたり、 はなんと巧妙に出来ていることか。例えば今こうやって はそのホルモンの生産命令であって、 いる性腺刺激ホルモンと言う物質の濃度を増やす。 ど)がそれを知り、 山道を歩きながらふと考える。 このようにある現象が起きたときに、 量はまた多くなってもとの正常な濃度となる。 激しい酸素の消費を要求される筋肉に そのホルモンをつくる器官に送って 心臓が破裂したりすることは 血液中の性ホルモンの 人も含めて動物の身体 作られる性ホ その現象その ホル これ ル 中 Ŧ T

で は早くなり、そうするとますます温度が上がる。 ると一般に反応は早くなる。この場合、 すると熱を発生するとする。 なものであろうか。 7 ような機構が無数に働いていて、 などがその良い例であろう。 反応が始まると、 いるのに驚く。 しまいには制御出来なくなってしまう。 れを元に戻すように働くことを「 温度が上がり、 では「正のフィードバック」とはどん 生物の機能が正常に働くためにはこの 例えばある化学反応があって、 普通の反応では温度が上が 温度が上がるから反応 しかも二

或るきっかけで

反応

火薬の爆

こうし

|重三重になっ

フ

1

は、 も知れない。 らない。しかし、 いているのは、 による自然を食いものにした開発に漠然とした心配を抱 ィードバックの方が強く働く。我々がこのような大資本 負のフィードバックが働いている限りあまり心配 あるが、 人や動物の生活は多かれ少なかれ自然破壊を伴うも 得た利潤をまた投資に廻すなど、 例えばある動物とその餌の関係のようにそこ 生物としての本能的な不安によるもの 例えば大資本による観光目的の開 どうしても正 のフ

澤井政信

記であるが、 辺の国々を彷徨した時の旅行記と釣行 は るだろう。 で本会々員である著者が、 是非 前半は、 さて、 両書とも明治大学山岳部〇 「陸の旅」をおすすめする。 金がなくとも暇のある方に 九七七年の明治大学ヒマ 『風の冥想 ヒマラヤ周 ヒマラヤ』 B

者を出してしまった痛恨の登山記であ こるかわからない。 上を逃し、 壁を登り切り、 の長大な東尾根から最後の急峻な氷 九五七年の本会登山隊が挑んだ、 での事故は、 下降中の不慮の事故で遭難 あと 歩のところで頂 つどこで何が起

ードとチベ ツ 大山脈 を経 後はニャラム・タン・ラを越えてネパ えてタリム盆地の西端カシュガ クンジェラブ峠をパ ルのカト ルファン、 西域南道のホータン、 てチベットのラサを訪ずれ 周 マンズに戻って、 「陸の旅」 敦煌、 青海省のゴ キスタン側 を完結した。 天山南路 Ł る。 ルムド ルに から マラヤ 至 越 0

ろう。 聞した鳥葬である。 をつっぱしり、 の許すまま旅をしたい方には参考にな すことができる。 わりにバスやト 本書で特筆したいのは、 広大な地域に足跡を印 西域やチベットを時 ラックに乗って砂漠 写真も詳しい。 直接見

釣人向の本ではなく、 や娼婦にまで筆がおよんでおり、 れた旅行記ではあるが、春をひさぐ街 るヒマラヤ南面の多くの川で釣糸をた キスタン、ネパール、インドに流れ もう一冊の『ヒマラヤを釣る』も、 辺境旅行記の一 並の た。 ろ、 2

サ なくなりそうだ。 てもゾッとする。 すごい大魚が川中にいたのかと今思っ ーツなんかを見せられると、こんなに ハル、インドの人喰いナマズ・ゴッ 人の大きさほどあるネパールの大魚 気軽に水浴びができ

きたなんて、 ヤ・アジアの大自然に囲まれて、 るのは私だけではあるまい。 の人々にふれながら憧れの地を彷徨で かりの時に、何年にもわたり、 何はともあれ、 たいへん羨ましいと感じ 三十代の一番働きざ ヒマラ 多く

<ヒマラヤを釣る> <風の冥想 定価二〇六〇円 六月三十日 立風書房刊 山と渓谷社刊 ヒマラヤン 九八九年十月 一八一頁 三一一頁 九八九年

t 7 ラ t 冒 **| 険家族**

尾崎 隆

な『ヒマラヤ冒険家族』という本がで るんだろうと不思議に思っていたとこ ースが聞こえなくなり、 このところ尾崎隆の八千は登頂の このたびその解答とも言えるよう どうしてい

受けられるパターンであるが、その後 冒険好きなフランス女性との結婚、 供の誕生、病気などを通じて家族皆の までは実力のあるクライマーによく見 にあきたらなくて小人数の登山、ここ していったかを述べている。 スペシャリストだった彼がいかに変化 この最初の章で尾崎は、 八千以峰 大遠征隊 子

私がとやかく言う筋合いでもない。 えるようになる過程が描かれている。 て行くのを淋しく感じないわけではな する山仲間で、世界の 私など彼がまだ無名の頃から知ってい ためになる素晴らしい旅をやろうと考 ンの一人として、八千ばから遠ざかっ した数少ない登山家である尾崎のファ て、 同じ鈴鹿の山をホームグランドと 人はそれぞれの生き方があり、 一流レベルに達 だ

> し支えない、 などと訳が違って、 なかなかハードな旅行で 冒険と言って差

獲るハニーマン達の活躍はすごいの一 も巨大な絶壁のオーバーハングの下に が出てきてたいへん興味深い。なかで できている世界最大のミッバチの巣を れているが、 ここには彼の言う、 いくつかの冒険紀行が記さ 我々の知らないネパール 子連れ探険隊が

れがかえって紀行文をバラエティーに

そ

らず読んでもらいたい本だ。 せられる一冊である。今後真君や沙羅 り方、子供の教育等についても考えさ 旅行することすら難しいが、家族のあ みである。子供を持つ親は山好きに限 は、家族全員である程度の期間 ャンがどんな大人に成長するか楽し いずれにしろ日本の社会に あ 一緒に 0 て

二三五頁 九八九年十月一日 定価一九〇〇円 山と渓谷社刊

(中世古隆司)

峰 2 号

悠

山 0 会刊

潟県 豊山、 と随想篇に大別されるが、 人山岳会である。 「悠峰山の会」 谷川岳、 山 のも のが目につく。 九頭山等やはり地元新 本号の内容は紀行篇 は新潟市にある社会 紀行には飯 カン

さすがに尾崎らしく、

家族の旅行

々その辺で見うけられる親子登

うが、 環境に即したやり方で好感が持て、 岳会なので会員の職業もさまざまと思 たのみで、 としての定例山行は巻末に記録を載せ の紀行文で占められている。 山の登り方も会員が自分の生 紀行は全て会員の個人山行 社会人山 活

らが楽しみである。 して会誌を作ろうとしている。 らず、文学にまで高まることを目標に し、しかもそれが単なる記録紀行に終 伴う文章は個性に従って 自由に 定した枠を作らず、 富んだものにしているようだ。 またこの会は、会としての一つの 登山行為やそれに 表 カン 固

平成元年八月 八頁 非売品 悠峰山の会刊 岩瀬皓祐 (8)

en el Mundo Alpinismo Español

Jose Maria Azpiazu Aldalur

山史紹介的な本である んに挿入された、 ついての各章からなる。 の遠征隊、 形的特長と初期の遠征隊及びスペイン ズー・クシュ、ヒマラヤの各地域の地 も含む)、 南 極、 アルピニズムの起源に始まり、北極、 グリーンランド、 小アジア、コーカサス、ヒン 最近のヒマラヤの遠征隊に スペイン人による登 写真もふんだ アジア 〇日本

下ディエゴ・デ・オルド

二年後の一五二一年、

コルテスの部

トルの登頂を果した。

これは近代の

スがポポカテ

であったろうが、その記録―標高五四

ルピニズムとは性質を異にするもの

・ゴンサレスによるペルーのミステ

一七八四年、

司祭ミゲ

た。原題は「世界」(標高五八四二點)

登頂まで維持さ

「世界におけるスペイン

八世紀ドイツに生まれ、ヨーロッパに 広がり、スペインには一八二三年、カ タロニア人グループにより発行されて いた『ヨーロッパ』という雑誌の協力 により紹介された。初期にはピレネー 山脈、ヨーロッパ・アルプスが活動の 舞台であった。

してあった年であった。 ときに、再びここを治めに戻ると予言 はメキシコの神ケツアルコアトル した年であった。余談になるが、 カテペトルが二百年ぶりの噴火を起こ キシコを征服した年は、 なことは、中南米での活躍であろう。 戦いに敗れ、 肌をもつと言われた)が他の神々と 五一九年、 ところで、 エルナン・コルテスがメ スペインの登山の特長的 アステカの地を去った 偶然にもポポ その数年前 同年

書室にある。 (市川佐江子)邦訳はないが、原書は日本山岳会図エデトリアルRM一九八〇年初版

豪印両隊員、

ゾンオフィサ

0

ニニズ

ムは

P

マン主義栄える

RIMO

MOUNTAIN ON THE SILK ROAD

PETER HILLARY 著

IJ

モはインド内東カラコ

ルム

に

あ

告書である。
告書である。

登山許可入手に手間どりヌプラ川とシャョーク川遡行ルートの各地に駐屯するインド軍の理解を得るのに苦労して広する氷雪のサセール峠と寂莫として広する氷雪のサセール峠と寂莫として広ける。行き倒れのロバの白骨が散在ている。行き倒れのロバの白骨が散在りを氷河上にBCを設営する。

ら白昼の空を走る彗星、

洪水など、

ア

ステカの民は凶兆に悩まされていた。

ルート偵察の後、南面から南東稜のルート偵察の後、南面から南東稜のルートの開拓、その上食糧不足と登 は足元から発生する雪崩等まだまだ続く の足元から発生する雪崩等まだまだ続く の上の別れが重なり十月五日頂上を正 躍がしたがらが、大八八○\||**まで行きつく える

チームワークが乱れた合同隊の難しさまれていたため登山行動の最終段階で川原流の筏下りを目的にした隊員も含考え方や行動の違いおよびシャヨーク

らわずか三な近くを通り、隔絶されたを克明に表現している。

荒涼とした山岳地帯で軍の施設や軍人が目についたと。元来古くからのシルクロード難関部の一部でE・シプトンがカシュガルに赴任する途上通過してが東四十年間、登山者が通っていない地域だけに遺跡もあり、上記の河畔・地域だけに遺跡もあり、上記の河畔・地域だけに遺跡もあり、上記の河畔・地域だけに遺跡もあり、上記の河畔・されている。

リー卿の子息である。

ラ

報告———

忘年会報告

> 辞を、 られた。乾杯がすむやいなや、 司 よい程だった。 バトンタッチで、 に手が延びて、 所狭しと並んだ料理の数々に、 会の入沢郁夫氏 話半ばに会長が駈けつけられ、 河野幾雄氏に依頼された。 お酒の消費も、 年の瀬の所感を述べ なく開 食卓に、 一せい とこ

頃に、 故、声楽の道を歩まれなかったの 次いで、 造詣の深い方でもあられるので、 る想いだった。 ープに仕立て、一曲指揮をとられ 0 さんの独唱、 会員の方々を、 チで座を湧かせ、 アルコールが程よく廻り、 訝しむ程の歌唱力に、 西丸震哉氏が、 この会には欠かせぬ山口節子 何時ものことながら、 即席のコーラスグル さらに、 軽妙洒落なスピ 耳を洗わ 音楽にも 中弛みの 周り れか

恒例の福引きには、何の因果か、く じ引きといえば、外れくじばかりという私が、豪華版の一等に当選してしま う私が、豪華版の一等に当選してしま い、この報告を書く破目となった。原 い、この報告を書く破目となった。原 いのだと思う。

末で一応、お開きとなった。しかし、 安者にマイクが引きつがれるという結 お願いしたが、またまた、中途で、司 お願いしたが、またまた、中途で、司 の辞を

郎氏をはじめ、

六十余名であった。

黒石

恒

な 会室は元通りに片付いていた。 めて二次会が始り、 ておられる方々なので、 んとなく飲み足り 張り、退け刻を心得暫しの歓談が続い 名誉会員の吉沢 な い方々で席を改 間もなく、 集

故古 市義孝氏

追悼集会

福 島 支 部

行 野 氏 氏 去 なわれ の最後の山行となった安達太良山新 された日本山岳会評議員 地コースに於いて福島支部の主催で 十二月十六・ (会員番号三二一七)の追悼登山 七 の両日、 先月六日逝 古市義孝 が

N. ゆっくりと今夜の会場、 は除雪された雪の山が見られる。 雪となり所によっては凍結し の旧道に入れば、 П 、ット状の新一一 十六日 を十五時三十分出発。 マイクロ そこはもう路面は圧 五号線より土湯峠 スにて福島駅西 融けてシャー 新野地温 道路端に 車は 泉相 四 ℃、 起り、 ならば、

親交のあった南会津山の会会員七名の より追悼懇親会。 家用車組の到着を待 支部長の挨拶 この会には氏と生前 いって、 十八時 氏 冥

> 会に入る。 福を祈っ

> > 祷

盃に

つづ

V

7

懇

親

員から古市

氏

0

披露され、

出席者自己紹介の

後

それぞ

れ

0

会

雨具をめぐる

ンポジウム(2)

科学研究委員会

汗は雨具の内から外に放出される。 %のとき水蒸気分圧Pは六・五TOR 例外ではない。問題の水蒸気分圧は気 かし外気が一四℃、H一○○%すなわ 五%ならば、内側のPは一三だから、 温と相対温度によって決まる。その結 透湿性膜の内外の水蒸気分圧の差に比 の第一世代でも第二世代でも、 メントを行いたい。 して起るもので、この点ゴアテック 安田武氏 これに対し衣内温度二○℃、 が一二であるとき、 例えば外気温五℃、 松永氏らの疑問に対 確に透湿現象は 衣内が二〇・ 湿度H一〇〇 その Н L 七

ると、 ることになる。 この意味では ゴワになったりする、 透湿性は低下する。 加工布の内面が氷結したり、 透湿性があるため、 般に外気温が高 これらの性質 一方零下にな 余計にムレ いと ゴ

六三・六%すなわちPーー・四 外部から内部に向って透湿が

> よ ユ + でも心得て利用した方が

れた。 具を使用した際のデメリットとしてR 以上の相関をもつとき、ほぼ信頼でき 以下これら四八例の使用結果に対し、 の成年男子モニターに実際、 などを圧着ラミネートした加工布を作 厚さ一五ミクロンのこの薄膜にタフタ 空気など気体分子は透すという透湿性 材料であるにもかかわらず、水蒸気や リマー膜中に親水基を導入することに ると受け止めて頂きたい。 総合評価に対する決定係数Rが〇・八 重回帰分析を適用した報告を行う。 ン、各高度の登山に使用して貰った。 品やゴム系加工品も採り上げ、 った。今回はこの加工布の他 高い順から並べると次の結果が得ら ある薄膜を開発した。雨衣用として、 西川演氏 確率的な取扱いによるものなので、 防水性、 我社ではポリウレタンポ 挠水性を備えた無孔質 たとえば雨 各シーズ 他社製 一八名

③接着部がゴワゴワし、 は一般に重く、 感がなくなるわけではない。 ①透湿性雨具を用いても、 山行では問題である。 快適性に劣る。 実際にム ②雨具

④保温力は必ずしも認めら 得られた。 とウールの方が遥かに快適との結果も コ 0)課題と考えられる。また下着として ットンは快適であるが、 これらは雨具用布に課せられた今後 濡れてくる ħ な

が起ってい した。 下着を着けたまま、持ち物全部を上 るえが止らなかった。 身は暖かくなったが、 毛のセーターをぢかに着たため、 会隊は同じ岩穴にビバークを強いられ で吹雪に見舞われた東大隊と西朋登高 った。一九五九年十月、 者共メリヤス製であったため凍死 あったため生還できたが、板倉氏は両 両氏はシャツ、ズボン下共にウールで た有名な冬山遭難において、槙、 るが、これには下着も大いに関係する。 ら被った。 スボン下だったので、 た。東大生三名は木綿のシャツを脱ぎ、 条件は凍死を防ぐことだと考えられ 一九二三年一月、立山松尾峠で起っ 安田武氏 南アルプスでも同様な凍死事故 このため夜中に る。 西朋の二名は上下共木綿 雨具として備えるべき第 続く| 下半身は木綿 それでも全員生 晩中ひざの 穂高滝谷B (中村純二) 二名共絶命 上半 三田 に至 沢 5

上げるのに十分であっ 氏のエピソード 人柄、 逸話、 は 座 功 上を盛り 績等 が に覆われて見えない。 げ 十七七 風が 通り抜けて から 目

時々雪煙を舞 鬼 天候の状態 面 Щ は ガ ス



故 古市義孝氏追悼集会·福島支部

来た。 遠藤明男、 藤光、赤沼節、 高田幸子、 早川瑠璃子、 遠藤日出男、 か下山の頃にはガスも少しづつ切れて (参加者) 会員の追悼に氏の無念さも薄らいだ 高橋洋一、 斎藤義晴、 十一時十分、 鈴木松三、 中西章、 八巻和男、 中嶋正夫、 阿部明義 斉藤かつら、 佐久間高男、 笹川慶子、 高野加代、 平野彰、 相模屋着。 吉田元、 渡辺千代蔵、 松井忠治、 大友 伊藤義男、 石井久子 相模八郎、 西関良光、 山崎健、 野地克 大友 佐

妻の山

一望できるこの峠も残念な

に仰ぎ見た磐梯山、

こよなく愛した吾

旧土湯峠反射塔に着く。

晴れていれば氏が少年の頃、

朝に夕

で見透しの利かない樹林帯を一

時間 ガス

若い会員が交互にラッセ

ル。

がら今日は望むことが出来ない。

風を避けて窪地に入り氏が生前愛用

したヤッケ、

カメラをストックに飾り

『雲の中のチベ 出版を祝う ツ 1

本山岳会・京都支部

日本

岳会京都支部共催のパーティには、 版記念パーティが、十一月八日夜、京都 ングと探検史』(小学館発行) 左京区の京大会館で開かれました。 た薬師義美さん 最近 ||寿雄前会長はじめ山の仲間ら八十 長岡京市在住)ご夫妻を招いての出 .本ネパール協会関西支部と日本山 ネ パール協会・関西支部共催 『雲の中のチベットー (会員番号五三一一 を出版 レッキ 今 6 九八五年のカトマンズからラサ

今回の

『雲の中のチベ

ット』

には

への旅

の見聞を軸に、

チベ

ット

0

歷

調のため頂上直下で涙をのんだ箕輪山 氏のありし日 体が不 した。 ともに、 が 駆けつ け、 今後の一 出 版 層の活躍を期待しま 0 お 祝い を述べると

が思わ

しく

ないので追悼登山は氏

の最

ウ

イスキーを供え、

昨年五月、

後の山行となったコースをたどって旧

雪は五十なから八十なにもなってく るがここまで来ればやはり冬の山、 れて九時登山開始。

暖冬といわれて 予定より

V

を偲んだ。 へ向って会員

積

時間遅

一同合掌、

とられた。それで本の値段も高くなっ は自分一人で動かしたが、 宴のようで…」と照れながら、 人にお礼を述べていました。 てしまった。」 むのにおおかた一年かかり、 った皆さんのたまもの」とあいさつ。 のはこれまで山行きを一緒にしてもら やかな雰囲気の中で出席した一人一 ト地図を作製するのにもまた時間 これに対し、 と出版に至る話を披露、 私はコリ性。 薬師さんは 出版できた 旧 探検の 文献を読 婚披露 「ペン ル

著作 どを訳し ドの『カンチェ グルジャ・ヒマール初登頂 北又谷、柳又谷遡行など)だけでなく、 と豊富な取材を基に な山歴を持つ一方、 れまで日本の山(主として北アルプス、 7 薬師さんは富山県の泊市の出身、 泊山岳会) ンの があり、 『ヒマラヤ文献目録』 フ ておられ 『カラコ カー またフレッシュフィール ンジュンガ 0 にみられるような多彩 『ヒマラヤ紀行』 ルムより 膨大な文献の研究 『遥かなるヒマラ など多くの パミー 周二、 (一九六九 ティ ح な ル

> 詳しく地図や写真を配して分り易く紹 史、 1 介してあります。奥行きの深いチベッ くに違いありません。 の解説、 風土、 案内書として定評を受けて 多くの探検家たちの 記録を

(文責・京都支部・ 木之下繁

会務報告

支部長会議

場所 十二月二日 本会会議室 十四四 時~

中嶋 長、 出席者 原常任評議員 田 魚本(宮崎)、 (福岡)、 (岐阜)、 (秋田) 村上 (山形)、 橋本(北海道)、 宗實 安間 (福島)、 山田会長、村木、 西 (静岡)、 (関西)、 (東九州)、 松田、 (富山)、 尾上 (越後)、 佐藤 奥野 (山陰)、 庄司 (宮城)、 (東海)、 (岩手)、 藤平両副 権藤 京 岡 鴫 松

11会長挨拶

(2)未来ヴィジョンについて

(3)海外登山基金の設置について 村木副会長

4全国支部事務局担当者会議報告村木副会 長

5)各支部現況報告………各支部長 ……松田常務理 事

いて、 の様な計画がある。東海(35周年記念 来年度の支部主要行事としては、 日出席の各支部長より、 それぞれ説明が行われた。 来年度の行事予定等につ 支部の 次 現

刊行)、関西 事業として海外登山隊二隊を天山・イ 登山を計画している)。 開催)、東九州 ンドへ派遣。『名古屋から見える山々』 出版)、山形 (宮崎ウエストン祭を十一月三日に 九月)、越後(『越後山岳』八号の (支部50年史の刊行)、 (35周年記念、 (全国支部懇談会の 豊後富士 宮 開

(6)その他検討事項

⑦本年度名誉会員推薦の件

戻して再審議して欲しい」旨の強い要 長からは、 の経過等につき、 六日の評議員会での推薦理由、 議の申し立てが出ているので、 い説明があった。これに対し東海支部 本件については、一部会員より、 「出来れば、 山田会長より、 理事会に差し 十一月 その後 異 ②早池峰山に於ける高山植物無断採取

になった。 項ではないので、 題であって、 支部長会議で議決する事 会長に一任すること

は至らず、 望が出されたが、

且つ、

本件は評議員会の問 大方の賛同を得るに

文書により意見の提出があった場合に

は一月理事会で再審議する。

回早池峰山に於ける高山植物無断採集

本件については、 岩手支部長から問題提起のあっ 時間切れのため、 た

> 一月十四 日の理事会で検討することに

十二月理事会

場所 十二月十四日 本会会議室 十八時三〇分~

橋本、 石橋、 委任出席 出席者 山田会長、村木、 原、平林、 入沢、 松田、 小倉両常任評議員 藤井の各理事、 重広、 穴田、小倉、 大島、大森の各常任評議員 西村、 関口、 織田沢、 太田監事、 藤本各理事、 松本、伊丹、 藤平両副会 早坂、 鴫

[I]審議事項

山許可申請……承認 (1)ナムチェバルワ峰登山許可申請の件 高所登山委員会より要請のあった登

(3)海外登山基金運営内規(案)検討の件 本件は、退会届受理を以て収拾した。 問題について、 原案通り承認。十二月二十三日迄に 岩手支部長より善処方要望があった

[II] 委員会報告

●自然保護(松本)

訪を受け、 を受けた。 招致委員会吉田事務局長以下六名の来 十二月十二日長野冬季オリンピック 当方の要望書に対する説明

●指導 (六田

講習会を実施する。 二~三月の間、 一回に分けて山 スキ

営費の一部を負担して欲しい。 一人の利用者があった。 高郷山荘の利用者数、 現地小集会を予定通り実施。 本年度は三三 会としても運

●山岳編集 (大森)

終える。 場合は、一月理事会の時にメモで提出 して欲しい。 十二月十三日、全会員に対し発送を 次号の内容につき、 希望ある

●総務

計上。翌日の記念山行は一〇六名の参 加者があった。 年次晩餐会の剰余金は雑収入として

リンスホテルのコンベンションセンタ ーを予約した。 来年度年次晩餐会の会場は、 高輪プ

●婦人懇談会(穴田)

●資料 (織田沢) 習会を実施(九名参加) えた。エーデルワイスクラブより、 十一月十九日、日和田 資料目録カードを作成、 山で岩登り講 図書館に備 女

●山研 (石橋)

性登山関係資料の寄贈を受けた。

大幅に上回った。 高所登山 本年度の利用者は六八九名で前年を (伊丹

> 月十七日、 (松田 委員会を開催した。

か」について、検討した。 ム、講演会は公開講座にすべきかどう Himalayan Adventure Trust 検討方依頼のあった (松田) 「シンポジュ 0 = 1

〔Ⅲ〕 其の他報告事項

ューデリー会議への参加要請の件に

0

の間の経緯、 員から推薦反対の意見が届いたが、 (1)篠田名誉会員推薦に関するその後 前回の理事会以後、 推薦理由等につき、 石原·石岡両 詳細 そ 会 0

臨時評議員会

な報告があった。

場所 一月十一日 本会会議室 十八時三十分~

野目、 各常任評議員、今西、 出席者 広羽、川上、吉村、室賀の各評議員 長、橋本、平林、 (委任出席) 日下田、奥原、 大森、 山田会長、村木、 井上の各評議員 小倉、大島、 大塚、 藤平両副 山野井、 鴫原の 杉

議事

事に入る。 議長として橋本評議員を選出して議

[議題I] 篠田軍治名誉会員に対する 異議申立ての件 十一月六日の評議員会での推薦にも

図書受入報告

図書委員会

平成元年 11 月受入図書

- 1. 蜂谷緑他著「尾瀬 失ってはならないもの」 あるちざん 1989 (蜂谷緑氏寄贈)
- 2. 読売新聞社編「史上最強の登山家 山田昇」読売新聞社 1989 (版元寄贈)
- 3.4. 日中合同 チベット高原学術調査討論会編「Proceeding of Sino-Japanese Joint Scientific Symposium on Tibetan Plateau I·II」(発行者寄贈)
- 5. 日本山岳会山陰支部編「山陰の百山」日本山岳会山陰支部 1989 (発行者寄贈)
- 6. 日本山岳会山陰支部編「創立四十周年記念誌」日本山岳会山 陰支部 1984 (発行者寄贈)
- 7. 福岡山の会編「中国 崑崙山脈 報告書 (1987)」福岡山の会 1989 (発行者寄贈)
- 8. 山雄会編「山雄会 25 年史-1989-」山雄会 1989 (三錦久 雄氏寄贈)
- 9. 足利武三者「諸国名山案内8 九州」山と渓谷社 1989 (版 元寄贈)
- 10. M. Ward et al., "High Altitude Medicine & Physiology Chapman & Hall" 1989 (著者寄贈)
- 11. S. Vanables, "Everest Kangshung Face" Hodder & Stoughton 1989 (購入)

- 12. S. Berry, "Thunder Dragon Kingdom" Crowood 1988
- 13. J. Roskelly, "Nanda Devi the Tragic Expedition" Oxford 1987 (購入)
- 14. C. Bremerkamp, "Living on the Edge" David & Charles 1987 (購入)
- 15. M. Anderson, "On the Big Hill" Faber & Faber 1988 (購入)
- 16. W. Unsworth, "Savage Snows the Story of Mont Blanc" Hodder & Stoughton 1986 (購入)
- 17. S. Angell, "Pinnacle Club A History of Women Climbing" The Pinnacle Club 1988 (購入)
- 18. P. Morrow "Beyond Everest" Camden House 1986 (購入)
- 19. H. Calvert, "Smythés Mountains" Gollancz 1985 (購入)
- 20. N. Croucher, "A Man and his Mountains" Kaye & Ward 1984 (購入)
- 21. T.J. Setnicka, "Wilderness Search and Rescue" Appalachian Mountain Club 1980 (購入)
- 22. C. Gunn, "The Expedition Cookbook" Chockstone Press 1988 (購入)
- 23. R.H. Julyan, "Mountain Names" Mountaineer 1984 (購入)
- 24. T. Daffern, "Avalanche Safety for Skier & Climbers" Rocky Mountain Books 1983/88 (購入)
- 25. K. Wilson ed., "The Games Climbers Play" Diaden 1978 /86 (購入)
- 26. R. Cassin, "50 Years of Alpinism" Diaden 1981 (購入)

つき委任さ

れ

た各評議員

0

意見が

長より

明

が

あ

0

た。

0

で た

から

0 3

~

5

たが、

これら意見を総合

n

出

議員から夫々意

処方

する要望

書が届

つき意見をうか

から

VI て れ

山

田会長より

+

月十

九

日

付会長に対 石原両会員

連

b

月

一日の

年次晚

餐会

理

支部長

井の 委任出席 穴 松 評 各理 議 田 員。 Ш 田 所 + 本会ル

口 伊 田 平 鴫 沢 原石 両 副 の橋

各

前

範

意を以 ことで意見 この要望書に対 て回答 0 すべ 致を見 きである 速や カン ٤

VI

石

石原両氏は会員 は変更する必要は

のことでも

7 問

題は

なく、

機関決定した

\$

な

L

カン

会の決め

方につい

ては、

手

提出 支予算の原案を作成、 各担当 来年度予算 欲 理 事別に、別紙 旨 の説明が 様式に基づ 二月七日迄 件 あ

た。

分

(1) ナイ 朔 が 件 別紙資料に 0 解 説

遭難問題 れ 加 Himalayan 0 V 0 内の 問 題 づ る 0 計 昨 今年 問 た ボ 題等に 画 題 チェ 山 \$ 方海外登山 各種規定類 委員会の見直しを含めた組 0 も多事多難 に眼を転ずれ P あ 僧院再建の募金につ ŋ, ついても具体的に着 Adventure 目前に控えて 玉 中 の整備、 0 際的問題とし ではナムチ 高年 な年で ば、 層 Trust 悩 登 の協力を 会員の資格 あると思 ح ま Щ I る。 0 正 3 T 問 対 0 きは な 月 ル 題 わ策 の方参 ワ

は 事 たが、 な 田 関 会に 議事に 頭 引 野 0 早 先立ち 一両監 き 坂、 続 から Щ 田 事 会 定 ŋ

各理

開

催 日

次

出 明 き、 П 確 0 登 大塚 理 山 0 n は すべ 事会で承認され 通 点 た。 基金委員 委員 は 細則 き n で n ょ は ŋ 会規定 る 12 こと 対 to \$ な 対 あ V た本規 村 カコ 象とする との 木委員 듬 す 0 で、 る 0 意見 発 が、

提 長

自然保護(松本)

(4)各委員会報告 が かあり、 本件了承する。

●山岳 (小倉)

提出して欲しい。 よりの要望があれば、 来年度の山岳の内容として各委員会 小倉理事宛至急

尾瀬の入山料につき検討中、

山小屋

三名参加の予定。リーダーに対する新 で調査したい。 の排水処理問題についても二年がかり 一月の八方尾根スキー -現地集会は五

に繰り入れた。 円の余剰金が出たがこれは会の雑収入 名の申込みがあった。 会報で公募した還歴セーターは六五 尚二八、三五八

種の保険を検討中

が順調に推移している。 十二月末を以て第三4半期を終った (西村)

岩登り講習につづき一月二〇日~二 (穴田)

_日、

八ケ岳、

赤岳で講習会を計画中

オリエンテー ショ ンの資料を作成中

って、 ●山研 (石橋) 山研の改築問題は、 総会迄には議題として出せるよ 建設委員会を作

●高所(重広)

加。 を認識する上で大変役に立った。 が ソ連の最先端の登山家との交流の糸口 ェで開催のMontagna Adventura 2000 つかめた。 十二月十一日~十四日、 ソ連をはじめとする共産圏の登山 田部井、 重広の三名で参 今後

めて一月末を目標に夫々計画立案中。 高所登山委員会では、 現在分担をき

8 日

指導委員会

たが、 推薦の「山の気象研究会」は選にも ŋ, (本会会員)の業績 秩父宮記念学術賞の選考委員会があ 本年度の受賞対象が決った。本会 日本民族学会推薦の中尾佐助氏 「栽培植物と農耕

的研究」に決定したとの通知が日本学 の起源に関する文化複合の民族植物学 (5)其の他 術振興会より届いた。

ものの転載の件は了承する。 敬、 ●五月書房より槙有恒遺稿集が、 等については、調査不充分のため、 れるが、『山岳』『山』等に掲載された 務理事会に一任する。 辰沼広吉両氏の監修により出版さ の件 太田 常

中田清兵衛

(三 八三)

姓名変更

●本日の入会承認者、 等につき、意見交換を行った。 復活会員は、 松沢哲郎 白馬方面の遭難の (九三八五番) 塩原国隆 坂井南雄治他十 (四二六 の両名)状況 田嶋 山中

フ 1 レ ンツ 5 日 2 日

6 日 支部長会議 婦人懇談会

7 日 学生部 報告会・ナンガパルバット、 ルグムスターグ、 エベレスト

9 日 12 H 忘年会 常務理事会、

14 日 理事会

19 日 資料委員会

21 日 20 日 三水会 フィルム委員会

自然保護委員会、 12月来室者37名 科学委員会

22 日

会員異動 **12** 月

物故

窪田 佐野 健治 昇三 (九六一八) (九七〇六) 12 7 • • • 20 11 11

斉藤 退会 征子 二男 (八〇四四 (九五一三)→秋山征子

田嶋 神田 (一〇一九八) (八六五九)

達夫

(八六五八

(12月)

○通常総会開催日決定

諸般の事情により本年度の総会は5月26日 (土) 午後5時, 全共連ビルにおいて開催する ことになりましたのでお知らせ致します。

総務委員会

発 平成二年二月二十日 ______ 行 他は一月号でお知らせの通り。 所 東京都千代田区 サンビュウハイツ四番町 五十代 田区四番町 五十

슾

印

刷

所

株 式会社

堂 ル六番三 厚 郎

◉山岳図書を語る夕べ日時変更 総務委員会

四月二十日(金)午後七時よりに変

場所

日本山岳会集会室

会費 日時 以前の入会の方も歓迎します。事務局 員の方には案内の文書を送付します)。 会の方を対象としておりますが、それ に申し込みの上ご参加下さい ンを開催します。今回は平成元年度入 第十六回新入会員オリエンテー 新入会員オリエンテーション 懇親会 三月十七日(土)十四時より 十七時~十九時頃まで (新入会

そお知らせ

234-6659

この電話で もお知らせ しています